

吉田幸一編

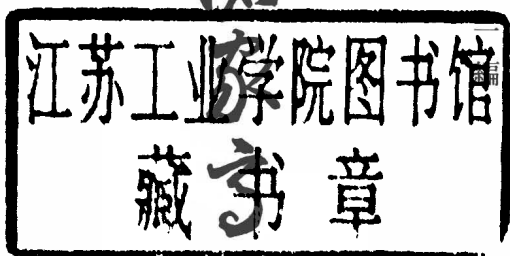
獲書
諸家字名記

下

古典文庫

吉田幸

書獲
諸



名記

下

古
典
文
庫

平成九年二月二十日印刷発行

非売品

編者 吉田幸一

発行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

製本者 共伸舎

記名高家諸
下

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七一七
振替口座 〇〇一九〇九一四五九七番

護國

諸家高名記
下

目次（下）

諸家高名記	卷之九	五
諸家高名記	卷之十	四三
諸家高名記	卷之十一	八一
諸家高名記	卷之十二	二九
諸家高名記	卷之十三	一五
諸家高名記	卷之十四	二〇五
諸家高名記	卷之十五終	二四七
解説		吉田 幸一 二九

凡 例（追記）

- (2) 上巻では、宛字、例えば、「白纒。
↓白幌。」と訂正したが、下巻では、**纒**の字を原本のままとした。また、「評定・評定」などは、両用されたままとした。

護 国

諸家高名記

九

諸家高名記卷之九

目録

① 阿州あしうたもと為朝明神靈れいげん験げんの事

附タリ

稲田修理亮いなだしゆりのすけせんば舟場合戦めいよ名譽めいよの事
中村右近あたがさき穢多崎しつはらいの事

② 後藤又兵衛青屋口あそやぐちをひらき討うて出る事

附タリ

大野主馬亮しゆめのすけてだて方便しそんを仕損しそんる事
縣をがた甚十郎しきの鳴野ぶせんにて武戦ぶせんの事（二才）

③ 木下左京亮きのしたさきやうのすけむすめ息女むしつ無実はらを晴はらす事

附タリ

小野初雪おのうしろ影向えうこうの松由来ゆらいの事

南条光明なんじやうみつあきつしま对馬のつばねを恋慕れんぼの事

④ 木村長門守いまふくつゝみ今福堤合戦の事

附タリ

渋谷内膳しぶやないぜん孔雀くじやくの尾をさし物の事

大関常陸おほぜきひたちのすけふちざき介すけ刈崎案内の事（二ウ）

① 稲田修理亮舟場合戦高名の事

修羅掌しゅらたなころのうちに。乾坤けんこんをにぎり。夜叉足下やしやくかに。泥龍でいりやうを踏ふ。十一月十九日。蜂須賀阿波守はちすか。御所の。御前へ参上仕りて。申さるゝやうハ。御内存計はかりがたく候得共。城をかく相守り。打すて置候も。余あまりに延引かとおぼへ候。上意をかうふりて。穢多崎あたたを。阿波守責せめをとし申さんとうかゝひ奉れば。一段しかるべし。松平宮内。浅野但馬へも。しめし合せて。一戦仕れの上意。有がたく阿波守。御前の退出たいしゅつの時。いよく宮内但馬と。入魂じゅこん仕れの仰せ。かへすゝかしこまり奉りて。阿波守陣所へかへりて。譜代ふの郎從稲田中村ちゅうむら。山田樋口ひぐちなどをめしよせ。何とかたゞ思ふぞや。我累年るい御厚恩こうおんのかうふり。一廉かどの御用

にたつべき身の。わづかなる責^{せめ}ぐちひとつを。自余の人(二オ)をあ
いまじゑて。をとしゑたればとて。何ほどの御奉公に成へきぞ。いそ
ぎ此あかつき。一ぶん^{いまだ}にをしよせ。即時^{そくじ}に踏^{ふみ}つぶし両御所の御機嫌に
入ん。いかにく^{いまだ}と有ければ。をのく御尤に。存じ奉ると申ける。
取わけ稲田^{いなだ}修理亮ハ。内存あつて。阿波守をいさめ。其身もはや。物
具人よりさきにかためける。されバ廿日のあけがたの。霜天にミちて。
残れる月影寒^{さむ}く。江楓^{かう}風わたつて。一の洲^{すこつ}勝間の川^{をき}沖に。漁火^{いさりひ}の光
うすく。雨雲に過て。なかばハひらく暁^{きやうばう}峯。孤鷺^{こるとん}飛で冬水^{とう}とともに
長天の一色^{しき}。蜂須賀^{はちす}阿波守。手勢一万余騎。卅^{まん}字の紋付たる旗。徐風^{しよ}
になびかして。穢^あ多崎^たにをしよせ。鯨波^{ときのかみ}をぞあげにける。此所ハ明
石丹後守。自他の軍勢。三万余騎にて。かためたるが。すハやよせた

るハといふより（二ウ）

はやくうつて出る。よせ手のかたに。稲田修理亮。囊頭のうとうの甲を。まへかたぶきに着なし。啄木たくぼくにうすぐれなるの打まぜ。これや小桜威の大胃。鵠毛つぎの馬に。ゆらりとこのつて。一陣にすゝんで。さしつめ。引つめ。射るほどにしぐろミかゝりし雑兵ぞう百騎ばかり射てをとし。猶もちものゝ鞆さやをはづし。馬をすゝめてわつて入。堅横たて十もんじにきりまくれバ。数十人疵きずをかうふり。馬にふミころされて。さつと引たりけり。さらバ息をつがんと。引しりぞく。明石丹後守下知して。猶もすゝんでうつて出る。所へ中村右近燕尾えんびの甲に。白糸にめぐりもへ黄ぎに。威をどしたる鎧よろい。糟毛かすげの馬に打のつて。足をためさせじと。敵をかけたてくおつつめける。山田織部八十五頭の甲に。惣くれなるの糸に

て。威おどしたる鎧。冬の紅葉の朝日に映あずる如く。花やかなる（三才）出
たち。油馬ゆばのたくましきに。鉄鎧かなあぶくをかけて。敵陣ふかくのり入支度
一もんじにかけやぶる。樋口内蔵助ハ。芥子殻形けしがらなりの甲に。藤威の鎧。
馬ハ黒毛の。琵琶股びわももふときに。鞭むちをあてゝのりこんだり。誠に蜂須賀
家の四天王とや恐れけん。あへてちかづくものハなし。丹後守。士卒
をちかづけ。さいぜん囊頭のうとうの甲に。小桜威をどしの鎧着たる武者ハ。人倫
によもあらしかならず是にむかふ事。有べからず其子細ハ。いかに精せい
兵びやうなればとて。一矢に五人三人。もしハ二人。一人を射めはすさず。
かゝるものハ音にもきかず。目に見る事のはしめなり。さらば此裏の
川に引て。舟にて天満へ引しりぞかん。しかし一向に引べからず。
すゝむやうにミせてハ引。引てハすゝみ。連々に裏川へまハるべしと。

下知しける。よせ手の大将。阿波守ハとくに裏川いぶかし（三ウ）

くおもひければ。森甚五兵衛。同じく甚太夫を。舟にてまハししかも
雑兵と。敵にミせん為に。物具を疎末にして。蓑の下に。鉄炮をも
たせたる。足輕百人をしたがへ。兩人ハさきだつて裏川にまハリけれ
バ。丹後守が思ふ所ちがいて。逃んとすれば舟手より。鉄炮を打かく
る。すゝまんとすれば。四人の勇士。射かくる矢さきハ。雨のあしよ
りはやく。くまんとすれば。四国の力者国打の刀にて。さんぐくに
打くたく。さしもの。丹後守あぐミはてて。つゐに矢疵をかうふり。
くびを敵にぞ。とられけるのこるもの共ハ。こゝかしこにて。射られ
きられて。一時ばかりのたゝかいに三万余騎のものども。一人ものが
れず。ミな死を同じうして。名をのこしにける。蜂須賀ハ言下に。穢



第三十図（九ノ四ウ）